

毎年春に新人を迎えるわけであるが、この新人の指導ということに関して新人指導という係が存在しているわけであるが、新人指導係のこれまでのありかたを振り返るに、反省ならびに考えさせられる点が多くある。そこで新人指導の方針ならびにありかたについてもう一度みなおいて見とめて方針というものをうたてなければならぬのではないかと考える。

(I) 新人というもののとらえ方

我部において新人なものは、全員白紙の状態より平等に考える。また個人の技術について上手、下手はあるがそれは、その時の指導によりあくまでも白紙の状態にはかわりはない。

(II) 新人指導とは

大雪山岳部において我部では4年間というシステムを形めている。かと言って4年間において「山登り」を成しえることは決してない。しかし岩登り、雪山と技術的レベルを上げて山への意欲を必要とすることは必知である。しかるに、このために新人を迎える段階において部は、ひとつの養成システムも作っておく必要がある。その意味においてシステムの一部として、大半を占める新人指導は重要性をおびて来る。

(III) 我部の方針として

現在我部はホルラウ球という方針を執っているわけであるが、このホルラウ球というもののとらえ方であるが、これはある一つの問題を含んでいる。即ち個人というものの部としての養成であるが、とりわけ新人に関してはある意味において半強制的態度で山行に参加させるということが必要になって来る。しかし部としては個人の思考性も考えた個人山行という形を取っている。ここにホルラウ球というものを本来の意味においてシステム化するには問題が生じて来る。しかし現在の部においては個人山行とホルラウ球が隔絶した状態として存在して来ているは、すである。しかし毎年そのホルラウ球のウエイトの占める割合が小さくなり個人の思考性はたまたま新人に対してさえも個人の思考性に向きまわらねばならぬ気が来る。これは現在ホルラウ球を方針として持っている部として考えなければならぬ問題と思われる。そこでこのホルラウ球の思考であるが、各人いろいろとらえ方があると思うが、今適切に表現としてあげて置くことにする。

山という大きなものの存在を考えると、これには、いくつかの要素、即ち岩登り、雪登り、沢、また季節による季節ごとの要求、そして山というものが考えられる。これらの要素に関して、個人と山をどう捉えて行くかということである。そしてこれらの要素を含むいろいろな山行形態において適切な判断と技術を養って行くことである。

